

精神看護実習における学生の自己意識の変化について

吉浜 文洋・良知 雅美

はじめに

臨地実習において、学生は二つの課題に直面する。患者についての看護上の問題解決と、そのベースとなる対人関係である。

精神看護実習において学生は、ある意味では予断と偏見をもち、緊張して実習に臨む。何しろ精神病院に足を踏み入れることや、精神障害者と密接に関ること自体がほとんどの学生にとって初めての体験である。率直に不安であることを認める学生も多い。病棟にもよるが実習2日目頃までは、背後で足音がしてもびくったというほど不安緊張の強い学生もいる。しかし、数日でほとんどの学生の不安は解消する。そして、患者との対人関係の成立をめぐる葛藤に焦点が移る。学生は患者の沈黙にとまどい、拒否、拒絶に傷つき、疎通の取れなさにあきらめの心境となる。実習1週目は、この不安、対人関係の困難さをめぐって実習が展開されるといってもよい。

この間、患者 看護師（実習生）関係のプロセスは問題解決過程とあざなえる縄のごとく、からみあって進行するといっていいただろう。

ただ、不安、緊張に個人差はある。初日からスムーズに関りがもてて、楽しめる実習だったという学生がいるかと思えば、コンタクトを取るのに難渋し、不快感を持ったまま実習を終える学生もいる。（実習後のレポートなどからすると後者の場合、学生は自分を責めがちになるようだ。患者さんとの対人関係の困難さは、学生の性格、患者の病態、性格、適応行動が相互に関係していて一方的に学生の責に帰すわけにはいかないこともある。）

この2年、実習病棟の要請で学生の個人的な実習目標、性格、実習への不安などを、オリエンテーション時に自己申告してもらっている。そして実習最終日、申告した内容に目を通してもらい実習が終了した時点で感じたことを自由に書いてもらうことにしている。回答のなかには、新たな自分を発見した、自分自身の性格、対人関係の傾向を再認識したというものも相当数みられる。

学生は、精神科病院の臨床実習で何を体験するのか。自己意識への影響という観点からそれを明らかにできれば、効果的な実習に必要な条件を考える視点の一つが得られるだろう。

本研究は、精神看護実習を通しておこる学生の自己意識の変化に焦点をあて、学生総体として見たときそれがどのように変化するかを明らかにしようとするものである。

なお、本稿での「自己意識」は梶田の考え方をもとに次のように定義する。1)

「人が、自らの身体的あるいは精神的特性、社会的な関係や役割などをめぐって、自分自身に対して持ついま、ここでのイメージや気づきであり、時間とともに変化するもの」

以下の定義も梶田を参考にしている。

自己概念：自己意識の背後にあって、個々人が自己の対して持っているイメージや認識、感情等の総体であり、その人の意識や行動に影響をもつ。

アイデンティティ：その人をその人たらしめている本質的な特性や属性。

方 法

精神看護実習の前後に質問紙を用いてデータを収集し、実習前後の記載内容を比較することで、自己意識の変化を分析した。

1. 対象

S 短期大学部看護学科 3 年生、58 名

2. データ収集方法

1) 実習前の質問紙調査

実習グループごとに行われる、実習直前オリエンテーション時に、「実習で学びたいこと」「実習に対する不安」「自分の性格」の 3 項目について、自由回答で記載してもらい、回収した。また、この質問紙に関しては実習病棟からの要請であること、コピーを実習病棟へ提出することを予め説明した。

2) 実習後の質問紙調査

実習最終日の昼休みに、各々が実習前に記載した質問紙を返却し、その内容を踏まえて、「実習で何が学べたか」「不安はどうなったか」「実習を通して見えてきた自分」の 3 項目について記載してもらった。質問紙の回収は、昼休み後に行われる合同反省会の終了後に行った。なお、質問紙には記名を求めた。

3. データの分析方法

分析の作業は、以下の手順で行った。

1) 実習前後の回答を学生個人毎につき合わせ、前後で対応した内容であるかを検討する。

2) 回答は、以下のように振り分けることができた。

実習前後で自己意識に変化があると考えられ、前後において記載内容が対応している回答

実習前後で変化があると考えられるも、前後において記載内容が対応していない回答

実習前後で自己意識の変化がないと考えられる回答

のどれにもあてはまらないと考えられる回答

今回、分析の対象としたのは と の回答である。

3) 「変化を感じたとする回答」「変化を感じなかったとする回答」の郡ごとに、実習前後の回答を矢印で示してカード化する。

4) 実習前後の回答を変化に着目して検討し、見出しをつける。

5) 見だしから共通性、関連性などを感じさせるカードをグループ化する。

6) 5)を一覧表にする。

6)一覧表から「分類」間の関係を考慮して作図する。

*カードは、個人単位ではなく、有意味な回答単位に作成した。

4. 倫理的配慮

実習直前のオリエンテーション時に、質問紙調査と面接調査の主旨と方法について、口頭で説明した。質問紙については実習病棟への提出、面接候補者選定のため、記名を求めたが、個人名が特定されないようコード化した。

これらの結果は本研究以外の目的で活用はしないこと、また実習の評価とも無関係であることを口頭・文書にて説明した。

結果及び考察

実習前後で自己意識に変化があったとする回答はカード数で26、変化はなかったとの回答は同じく15あった。

表1に「自己意識に変化があったとする回答」を、表2に「変化はなかったとする回答」を整理した。

図1、図2は、表をもとに見出し、分類の相互関係を表したものである。

図1、2で示された看護学生の実習前後における自己意識の変化を若干の解釈を交えて叙述すると以下のようになる。

図1 <新たな自分の発見・・・自己意識に変化があった>

ネガティブなイメージの自分

学生は、実習後、否定的な自己意識を持ち、一貫性のない自分を発見することがある。それまでも自分の性格が受け入れられなかったが、ますますそれが拡大する自己嫌悪の経験(8-3-a)などである。自己中心的ではあるがそれなりにプラス指向だと実習前には考えていたが、実習を通して、他者の意見に影響されやすく「自分がない」という自己意識を持つ学生もいる(9-1)。否定的な自己像が意識に登りあらわになってくるのである。

また、自分はこういう人間だと、ある固定した自己概念をもっていたがそれが揺るがされる体験をする学生がいる(1-2-a)。それは、条件によっては、違う自分を意識するからであり、相手の態度如何で対応を変える自分に気づくからである(1-3)。疑うことを知らず、言われたとおりを信じてしまう性質だと思っていたが、「今回の実習では患者さんの訴える痛みに対して、本当にどうかと疑ってしまうところがあった」とふりかえっている学生も自己概念が穏やかに揺らいでいると考えられる(3-3)。

これらは、対人関係のなかで自己は、安定した一貫性のあるものではなく、相手や場面によって異なった現われ方をすることに気づいた体験といえるだろう。それは、また他者の意見に左右されやすい自己の発見であり(9-1)、ニコニコしているかと思うと、無口になり冷静になっているような変化してやまない自己を意識することである(9-6)。カンファレンスの場面などでの自己のとらえ返しとして、このように自覚したようだ。

不全感の残った場面や体験が気がかりとなり実習終了まで引きずる学生もいる。「明朗快活」であったはずの自分がどこかにいってしまい、「緊張でこわばる自分」だけが思い起こされて釈然とせず、その契機となった体験が頭から離れないという事態である(2-6-a)。楽天的で「何とかなる」が信条であ

ったはずが、カンファレンスの場面であろうか、「自分の意見がまとまらないうと、もやもやがとれない」と嘆く(3-5-a)。この学生は、解決を時間に委ねるような楽天的な自分ではなく、けっこうこだわっている自分を発見している。患者さんの話を聞いていて、切り上げ時期を決断できず、「患者さんのペースにはまってしまう」学生。彼女は、「てきぱきと行動するのが苦手」とはいえ、いつもの自分のペースが取り戻せずジレンマに陥ったと不全感をもつ(6-2)。

ポジティブな自己イメージへの変化

自分自身では、「心配性」「あわてもの」「(他者から)影響されやすい」「マイペース(人間)」など、実習前には否定的な自己意識をもっていて、必ずしも自己評価が高いとはいえなかった学生たちがいる。そのなかの一人は、神経質ではなく「ある程度軽く考えられたりできる」ようになっている自分を発見する(5-2)。実習を通して見えてきたのは、それまでの自己概念とは逆の好ましいと思える性格であった。

「相手のペースを尊重できる」自分を見出した学生の場合、それまでは、他者への配慮を欠いた「マイペース」人間だとの自己イメージであつた(8-6)。意外と「落ち着いて行動できるところもある」と自信を持つ学生もいる(5-3)。本人自身、「人に何かいわれると影響されやすいと思っていたが、自分の意見を貫きたい時は、貫くことができた場面もあり、意外な一面がみられたと思う」と驚く(8-2-b)。このように否定的な自己意識が逆転する場合、学生達は更新された自己意識を「意外」と驚きをもって受け止めるようだ。

「わがまま」と自覚していて自己コントロールの欠如を感じていた学生は、「物事をいい方に考えている。ポジティブ思考。」と脈絡は追いきいが、肯定的な自己意識にリフレインしている(9-2)。

さらに深まる自己理解

このように学生は、実習を通してポジティブな自己イメージを持つことがあるが、さらに自己理解を深めてその高い自己評価の底にあるものに気づくこともある。

「笑っていることが多い」自分が実は、「とりあえず笑っている」だけだったのだという気づきも、これまでの自己概念に疑いが出てきているということだろう(1-2-b)。この2つの笑顔の違いは、実習前後で微妙に違う学生自身の自己意識を表していると考えられる。笑顔を絶やさず、愛想をふりまっていた自分が、実は「とりあえず」そうしているだけで、板につかない一種の表層演技であったことを自覚したということの表明なのであろう。あるいは、「笑っていることが多い」自分を仮面として感じ違和感を覚え始めたとも考えられる。「とりあえず(笑っている)」という自己理解の留保のなかに深まっていく自己理解の端緒が感じとれる。

「私は表向きは明るい、心のなかは暗いかもしれない」と書いてきた学生。実習中の体験が、彼女のアイデンティティを揺るがしているのだろう(8-3-b)。外向きに演じられた「明るい」自分で対処できない事態に遭遇したのであろうか。「明るいだけが取り柄」という自己評価だっただけに、表層の「明るい自分」から透かして見えた心の底にある暗さに気づき、自己評価が揺らいでいる。

苦手意識を持ったが故に距離をちぢめられなかった対人関係から、誰とも円満な対人関係が築けると考えていた自己理解は、実は表面的であったと反省的に振り返っている学生もいる(1-4-b)。

このように、学生は、実習前の自己意識に違和感が生じ、これまで「明るい」「円満な」「誰とでも話せる」とポジティブに評価していた自己が必ずしもそうではないと気づく。自分の性格の表層(外向きの顔)と深層(本当の自分)、表と裏として考えはじめる。このアイデンティティの揺らぎは、自己概念の立て

直しを迫ることになる。この自己評価・アイデンティティの揺らぎから再建へのプロセスが学生の自己理解を深めるのだろう。

自己理解が深まる場合、肯定的に評価していた自己の揺らぎがきっかけになることが多いようだが、否定的な自己の再確認を通して自己理解が深まることもある。「考えや行動に自信がない」ゆえに自分の感情や現実から逃げている自分がいると感じた学生がそれにあたる(10-6)。

グループ体験

精神看護実習には、「昼休みセッション」がある。昼食後の1時間、グループワークを主体とした活動を行なうプログラムである。それに、毎日の実習の締めくくりとして行なわれる学生カンファレンス、全学生、教員、実習指導者が一同に会する実習最終日の合同カンファレンスもある。これらのグループ体験も自己理解を深める契機となっていることが考えられる。

学生は「意外と自分の主張も言えた気がする」と、集団の中で話すことの苦手意識が和らぐ経験をする(1-4-a)。学生は、昼休みセッションで自分自身のカンファレンスへの参加態度をふりかえるよう促される。その結果、カンファレンスの雰囲気が変わり、無理することなくグループ討論に積極的に関わっている自分がいたということだろう。

それまでのカンファレンスでの自分を「よくしゃべって明るい性格」が出ていたと考えていた学生は、この高い自己評価を再検討する(2-5)。「よくしゃべって」いたのは「沈黙に弱く」発言が途切れると不安とまではいえないが落ち着かなくて「自分の思っていたことなどすぐ口に出し」ていただけではないかと。沈黙にも充実した沈黙があることを理解して、耐えていられるようになったとしたら、これも昼休みセッションの効果である可能性がある。

コミュニケーション

自分の何事にも「積極的」といういい面も、対象により、場面によっては相手の意向を尊重しない一人よがりの「おしつけ」になってしまう(6-5)。このことを意識した学生は、一方向的ではなく、双方向的なコミュニケーションやケアを意識し「相手のペース」に合わせることを心がけるようになるだろう。

コミュニケーションは、相手次第ということに気づき自己評価の変更にいたる学生もいる。「誰とでもすぐ打ち解け」ることができると思っていたが、「一歩がなかなか出ない」という体験があって、そう感じたようだ(2-2)。対人関係がうまくいっていたのは、相手に助けられてのことで、距離を置く人、拒否的な人が相手だと、そううまくいかないことを知ったのである。

「小さなことにくよくよしない」と肯定的に自己評価していた学生(2-6-b)。彼女は、「小さなことに」くよくよしないおらかな自分だけでなく、それを「喜べる自分」を見出し「意外と単純!？」と驚きを表明している。おらかなさと、人生の機微を味わえることの並存は、「単純」という軽さではなく、むしろ豊かな感受性を感じさせてくれる。

図2 <同じ自分を再確認>

これまでと違う自分を発見する学生がいる一方、やはり「わたしはわたし」と実習前後で自己意識に変化はなかったとする学生もいる。ただ、同じ自分を確認したといっても、微妙な揺れが感じられる回答が目立つ(4-1、6-3、9-3、2-3など)。新たな自分を発見する学生と、同じ自分が確認で

きただけという学生の違いは、自己意識の揺さぶられる程度の違いなのかもしれない。

自分のいい面が出せるように努力・・・揺らぎと立て直し

努力家を自認する学生は、初対面の人は苦手なのだが「実習に来ている以上、頑張っ話しかけようと努力」したと答えている。揺れる自分をコントロールして、課題に立ち向かっている姿勢が「実習に来ている以上」という表現のなかに感じ取られる。この姿勢は、使命感めいたものに突き動かされ、動揺を押さえようとしている学生自身の意図的な努力に支えられていると思われる。(4 - 1)

自分の頑固さを確認することになった学生は、「混乱し」思い悩んだ末「納得できないアドバイスには従わなかった」という。彼女もまたアイデンティティの揺らぎから立てなおす過程を経験していることになる(9 - 3)

ネガティブな面を自己分析

自分の対人関係の否定的面を、吟味し、とらえ返した学生もいる。そのなかのひとは聞き役に回る人が多いのは相手の反応が気になるあまり、考えていることはあっても自分の意見を表明できないことに原因があると気づいた(2 - 3)

マイペースな自分を再確認した学生は、相手に合わせようとする傾向があって、それがストレスになると自己分析する。そして、マイペースな自分にふさわしい状況設定が必要だと正当化し、自分を保っている(3 - 6)

自分の対人関係の傾向を確認

性格どおりの自分であったことを実習を通じて再確認した学生の自己意識のありようは、単一ではない。実習でもいつもの自分が現われていただけといっても、自己を再確認する経緯は微妙に異なるようだ。

楽天的なのはいいにしても、「詰めが甘い部分」があって最後は上手く行かない経験をしている学生は、実習でもやはり「楽天的な自分」であったとだけ淡泊に回答している(1 - 5)。「警戒心」がなく、人なつっこ過ぎてだまされやすいのは、実習でもその通りであったと答えている学生もいる(3 - 5 - c)。単純に「楽天的は、あまりかわらなかった」とだけの答えもある(8 - 2 - a)

児童思春期精神科棟の実習で「患児のなかに関していけなくて」困ったが、それはもともと人見知りする性質だからであるといつも自分が実習でも出ていることを確認した学生もいた(4 - 4)。気分がむらがなく「感情を表出しない」傾向は、実習でも同様であることに「あらためて気づきました」と、とりえず評価を保留して事実を冷静にみようとしていると思える記述もみられる(5 - 5)。「いつもの自分ももっとくっきりみえた」という学生。彼女は、関係のとれていない患者さんにストレートに考えていることを伝えられないし、必要なことさえ「躊躇して」言えていない自分の臆病さを明確に確認したようだ(5 - 6)。拒否能力がないうえに、上手く自分の意見を伝えられないことを自覚していた学生は、やはり実習の場面でも「言いたいことが言えない性格がでてしまった」と書いている(8 - 4)。

従前どおりの自分であったと確認できても、それに評価が加わることがある。もともと「深く考えないタイプ」であったが、「あまり深く考えすぎないところがよかったのかもしれない」という答えがそれである(6 - 3)。「明日考えよう」的な楽天的な性格が反映しているのだろう。これは、実習で見えてきた自分自身を肯定的に評価していることになる。

同じ楽道家でも、その場の雰囲気流されてしまうということなのか「のせられやすい、のってしまふ。お調子者？」とやや自嘲気味に自己評価している学生もいる(3 - 5 - b)。一方、「色々考えすぎ

るところがある」と悩む場合もある(6-1)。

実習の対人関係でも性格のいい面が出て「患者さん一人一人と正直に向き合えた」と高い自己評価とともに変化のない自分を認めている学生(7-3)。この学生は、実習で自己評価が揺らぐような体験をしていないのか、それとも防衛的なのか。ともかく、確固とした自己への信頼が表明されていることは確かだ。

以上、図解した学生の精神看護実習前後における自己意識の変化の全体像を叙述することを試みた。

<臨地実習と学生の自己意識>

看護過程には、問題解決過程としての看護過程と、その基礎となる対人関係の発展過程としての看護過程がある。中西は、次のように臨床実習でこの2つの看護過程は患者、学生双方が対象化されるプロセスであると述べている。

「学生たちが克服し再構築をはかるべきは、患者についての問題や知識であると同時に、自分自身についての問題や知識でもある。その結果、看護過程を学習した学生たちはその最終成果として、新たな患者像と同時に新たな自己像ないし、より明瞭な自己像を抱いているはずなのである。いうなれば自分についての新たな発見である。」²⁾

われわれの行った質問紙調査への回答からも学生は、中西の述べている通り実習後に「新しい自己像ないしより明瞭な自己像」を意識することは確認できる。これは自己意識ないし自己概念が変化したということである。

自己評価という観点からすると、「新たな自己の発見」として意識される自己像にはプラスイメージとマイナスイメージがある。マイナスイメージの自己像では、「一貫性のない自分」が意識されることに注目したい。これまでの安定していた自己概念、アイデンティティが揺らいでいるのである。この揺らぎを軸に学生の自己理解は深まり、揺らぎの建て直しが上手く行かないと不全感を残して実習を終えろと考えられる。

実習前後で自己意識に変化はなかったと回答している学生も、自己概念の揺らぎから立て直しを経験していることが多い。その揺らぎから立てなおしの過程で「変化のなかった自分」を再確認すると考えていだろう。その場合、実習前と同じ自分であっても「より明瞭な自己像」を意識することになる。

「新たな自己の発見」「変化のなかった自分」のどちらであれ、この学生の自己概念の揺らぎから立て直しの過程をサポートすることが実習担当教員には求められている。

菅野らは、self-esteem尺度質問紙を使用して、臨地実習前後の学生の自尊感情を測定し、実習前に自尊感情得点の平均ないし低い学生は、実習後に得点が上昇したと報告している。³⁾

われわれのデータで自尊感情が高まっているといえそうなのは、「ポジティブな自己の発見」「深まる自己理解」「自分のいい面が出せるように努力」「自分の対人関係の傾向を確認」の回答を寄せた学生である。一方、「マイナスイメージの自己」「残る不全感」「一貫性のない自己の発見」など、自尊感情が低下していると思える回答もある。

方法、分析の仕方が異なるので菅野らの研究と本稿を比較するには無理がある。しかし、これらを考慮しても、われわれのデータからは実習後に自尊感情が高まる傾向にあると想定することは困難に思える。

石寺は、4人の看護学生の看護実技演習前後における自己意識の変化を、演習自己評価記録と面接調査

で明らかにしている。4) この質的研究の結果は、演習を通じて自分が「変化した」と意識している学生と、「変化しなかった」とする学生に分かれている。研究の対象となった学生の人数は少ないが、演習の前後で自己意識が「変化した」「変化しなかった」とする学生に分かれるのはわれわれの場合と同様である。

学生は、臨地実習において、時に患者との関係を築くのに困難を覚える。その対人関係上の不安が、その後のケアを左右する。看護の実践は、患者 看護者関係を抜きにしては成り立ちえない。したがって、実習生が出会う対人関係上の問題をどう切り抜けるかの方略が示されないと、実習のその後の展開は保証されない。そのために活用されているのがプロセスレコード等の対人関係をふりかえる技法である。このふりかえりの作業で、自己意識の変化に着目して、それを手がかりに実習体験の内容を吟味することは、対人関係発展の学習に有効な方法だろう。

おわりに

本稿では、学生の臨地実習前後の自己意識の変化について、精神看護実習前後の質問紙調査をもとに検討した。自己意識の変化の内容については、自由回答の分析であるから主観性の強いものとならざるを得ない。学生の自己意識の変化について、ある程度イメージを描くことはできた。しかし、実習におけるどのような体験が自己意識の変化と関連しているかは、学生へのインタビューが不十分であったため、検討できなかった。今後の課題としたい。

自己概念、自己意識、精神看護実習、看護教育をキーワードにした医中誌、JOIS の文献検索を行ったが、実習や演習と看護学生の自己意識、自己概念の関係についての研究は、数件であった。関心をもたれていない研究領域のようだ。しかし、精神看護の臨地実習の経験からすると、実習前後における学生の自己意識の変化、その要因の解明は興味深い。実習前後における学生の自己意識の変化を検討すれば、実習で学生は、患者との間にどのような対人関係を経験したかが明確になると思われる。

何が自己意識の変化に関連しているかを明らかにできれば、実習における学習支援に多くの示唆を与えてくれるだろう。

引用・参考文献

- 1) 梶田勲一：自己意識の心理学[第2版]、東京大学出版会、1988
- 2) 中西睦子：臨床教育論 体験からことばへ、ゆみる出版、P110、1983
- 3) 菅野久美子、他：看護学生の自尊感情の変化 臨地実習生の実習前後のSE比較および満足感との関係、第28回日本看護学会収録(看護教育)、p129-131、1997
- 4) 石寺恭子：看護学生の自己意識 看護技術演習を通してみた変化、北海道医療大学看護福祉学部紀要 No.8 p51-61、2001
- 5) A.R.ホックシールド著、石川准・室伏亜希訳：管理される心 感情が商品になるとき、世界思想社、2000
- 6) 小宮山実：仮面の人間学 創造性の病理、日本評論社、1999
- 7) 川喜田二郎：KJ法 混沌をして語らしめる、日本公論社、1986
- 8) 水野節夫：事例分析への挑戦 ‘個人’返照への事例媒介的アプローチの試み、東信堂、2000

表1:自己意識に変化があったとする回答(26 回答)

分類	見出し	学生の回答(実習前 実習後)
否定的な自分が見えてくる	ネガティブな自分が見えた	最近非常に短気であり、つくづく忍耐力に欠け、自己中心的な性格であると思う。私はひどく負けず嫌いで、大人気ないと思う。ひどく心の中がいやらしい。もっと広い心がほしいと思う。(8-3-a)
	自己嫌悪	あまり考え込まないようにする性格。 マイナス思考。(8-5)
	流されやすい自分	自分の都合のいいように考えてしまう(自己中、いい意味でプラス思考)。他の意見に流されやすく、自分がないと思った。(9-1)
一貫性のない自分の発見	条件によっては、違う自分が現れる	前向きでありひとつのことにこだわらない。相手の気持ちが見えないと不安になりやすい。(1-2-a)
	相手の態度で対応を変える自分に気付いた	誰とでも仲良く接することができます。拒否されると、とことん引いてしまう。受け入れられると、とことんつくす。(1-3)
	相手、場面によって違う自分	相手の言うことをすぐ信じてしまう(信用しやすい)。すぐ人を信じてしまうと書いたけど、今回の実習では患者さんの訴える痛みに対して、本当にどうかと疑ってしまうところが多かった。(3-3)
	影響されやすい自分の発見	他人にはこだわらないが、自分にはこだわる。人の意見に左右されやすい。(9-4)
	急に変化する自分	ニコニコ。 いっつもニコニコしつつ、いきなり(カンファとかで)無口になり、冷静になっている自分。(9-6)
性格の表と裏に気付く	微妙に違う自分	笑っていることが多い。とりあえず笑っている。(1-2-b)
	表面的な自己理解	誰とでも円満な人間関係を築けると思う。接する前から、この人が苦手かとも思い、近づけないことも多い。円満な人間関係は表面だけの関係だったりするのかもしれない。得意とはいえないと思った。(1-4-b)
	表現された自分と本当の自分	明るいだけが取り柄。私は表向きは明るい、心のなかは暗いかもしれない。(8-3-b)
	表面的な対人関係であった自分	あまり人見知りせず、誰とでも話すことができる。相手の立場になってその人の気持ちを考えるのが苦手だと感じた。(10-3)
	逃避的な自分に気づく	自分の考えや行動に自信がない。私は、向き合いたくない現実や気持ち、自分の反応や相手の反応から逃げていることがあると思いました。(10-6)
CFでの自分を振り返る	セッションの効果	大勢の前で自分の意見を主張することが苦手。みんなの前で自分の意見言うの嫌だったが、セッションでカンファレンスの仕方を学んだ時に、カンファレンスはこうやっていけばいいのかということが分かり、意見も言いやすい雰囲気のカンファレンスになったので、意外と自分の主張も言えていた気がする。(1-4-a)
	カンファレンスで性格が出る	よくしゃべって、明るい性格。沈黙に弱く、すぐ自分から会話を切り出してしまふ。カンファレンスでも先に言い出すほうで、自分の思ったことなどすぐ口に出しやすい。(2-5)
ポジティブな自己の発見	逆の性格傾向に気付く	心配性。神経質な面があるように感じていたけれど、そうでもないのかな、と思いました。ある程度、軽く考えたりもできるように思いました。(5-2)
	しっかりした自分の確認	慌ててしまうと落ち着きがなくなってしまうので、気をつけるようにはしています。慌ててしまうことがなく、落ち着いて行動できるところもあるのだと思った。(5-3)
	意外に自分の意見を押し通す	人に何か言われると影響しやすい。人に何か言われると影響されやすいと思っていたが、本当に自分の意見を貫きたい時は、貫くことができた場面もあり、意外な一面がみられたと思う。(8-2-b)
	相手に合わせられる自分の発見	マイペース。相手のペースを尊重できる。(8-6)
	別の見方で肯定的に	わがまま。物事をいい方に考えている。ポジティブ思考。(9-2)

残る不安全感	いつもの自分を取り繕うことができない	明朗快活、笑顔。 笑顔をたやさないようにしても、緊張でこわばる自分。(2-6-a)
	悩み続ける自分	すぐ「ま、いっか、なんとかなる。」となる。てきとう？ 自分の意見がまとまらなと、もやもやがとれない。(3-5-a)
	巻き込まれてジレンマ	マイペースで、てきぱきと行動することが苦手。 患者さんが話し掛けてくれるといつまでも聞いてしまい、患者さんのペースにはまってしまう。一回はまってしまうと抜け出せなくて、困ってしまう。(6-2)
	相手に助けられていた対人関係	明るく誰とでもすぐに打ち解け、仲良くなることができます。 周りに集まって下さる方とは、すぐに打ち解けられたが、遠くにいる方や側によろうとしない方に接する一歩がなかなか出ない(でも一歩近づけば、打ち解けられる)。(2-2)
	より肯定的な自分の発見	小さなことにくよくよしない。 小さなことに喜べる自分(意外と単純?!)。(2-6-b)
	積極性が裏目に	積極的に行動する。 積極的に行動するが、それが押し付けになってしまうことがあるかと思った。もっと相手のペースに合わせてあげられればいいと思う。(6-5)

表2: 自己意識に変化がなかったとする回答(15 回答)

分類	見出し	学生の回答(実習前 実習後)
自分のいい面が出せるように努力	いつも通り、自分がやらなければならないことをやるだけ	努力家。 初対面の人との関わりは得意ではないけれど、実習に来ている以上、頑張って話し掛けようと努力していたと思う。(4-1)
	揺れたが、自分を貫いた	頑固なところもあり、納得できないことには従わない。 自分の視点や価値観が定まっていなかったため、いろいろな考えや意見に左右され混乱した。しかし、結局は納得できないアドバイスには従わなかった。(9-3)
ネガティブな面を自己分析	自己の傾向を分析	自分から話すより、人の話を聞いているほうが多い。 私はこういって相手はどう思うとか、自分のなかだけで考えすぎてしまう面があって、自分はこうしてみたいとか、こう思うけどどうだろうという思いを、なかなか口に出して伝えることができないようである。(2-3)
	変わろうとするとストレス	かなりマイペースだと思う。 改めて私はマイペースだと思った。また、私は自分ひとりの時間を大切にすし、そういう時間が必要だと思った。私は人と合わせなきゃ合わせなきゃと思ってしまい、それが逆に時々ストレスになるのかもな、と思った。(3-6)
自分の対人関係の傾向を確認	やはり性格どおり	楽天的な面があると思います。しかしその反面、詰めが甘い部分がある様に思います。 楽天的な自分。(1-5)
	性格どおりの自分を確認	人見知り。 人見知りがあったので、最初患いのなかに関わっていけなくて、性格が表れているなと思った。(4-4)
	改めて自己確認	表にあまり感情の起伏を表さず、温和に人と接することができる。 相手に対し、感情は表出しないことを改めて気づきました。(5-5)
	自分の対人関係の特徴を鮮明に確認	最初は人とコミュニケーションを取るのが苦手であるが、一度取れると苦手意識はなくなる。 正直な気持ちをぶつけようとする、どうしたらよいかまだ焦ってしまったり、どうしようも弱気になる自分がまだいると思う。相手に伝えなくてはならないことも躊躇してしまう、いつもの自分がもっとくっきりと見えた。(5-6)
	ケアの場面で性格どおりの行動	言いたいことがなかなか言えないことが多い。自分の意見を人に伝えるのが下手。 オセロに誘われて、上手く断れないことが多かった。そこで言いたいことが言えない性格が出てしまった。(8-4)
	同一の自分の確認	だまされやすい。 警戒心がない。人なつこすぎる？(3-5-c)
	同じ自分を確認	楽天的。 楽天的はあまり変わらなかった。(8-2-a)
	ネガティブになってしまう	物事を悪いほうに、しかも深く考え過ぎる。 自分で色々考えすぎるところがある。(6-1)

マイナスイメージだったが、それはそれでいい面も	あまり深く考えないタイプ、意識の転換ができる。あまり深く考えすぎないところがよかったのかもしれない。(6-3)
いい面が出た	誰とでも話せる。人なつこいほうだと思う。患者さん一人一人と正直に向き合えたと思う。(7-3)
変わらない自己の確認	八方美人らしい、楽道家。他人にのせられやすい、のってしまう。お調子者？(3-5-c)

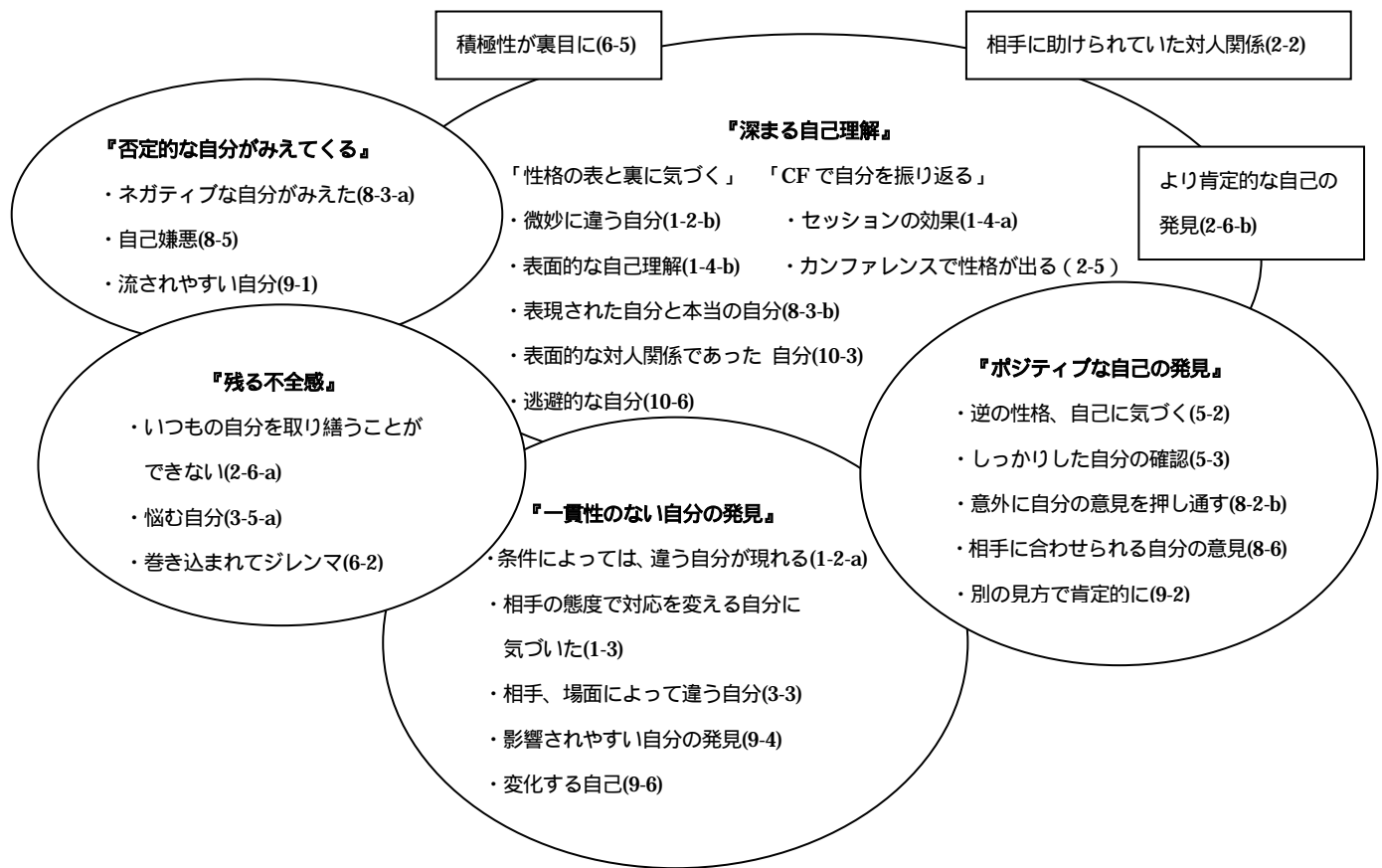


図1：自己意識に変化があったとする回答

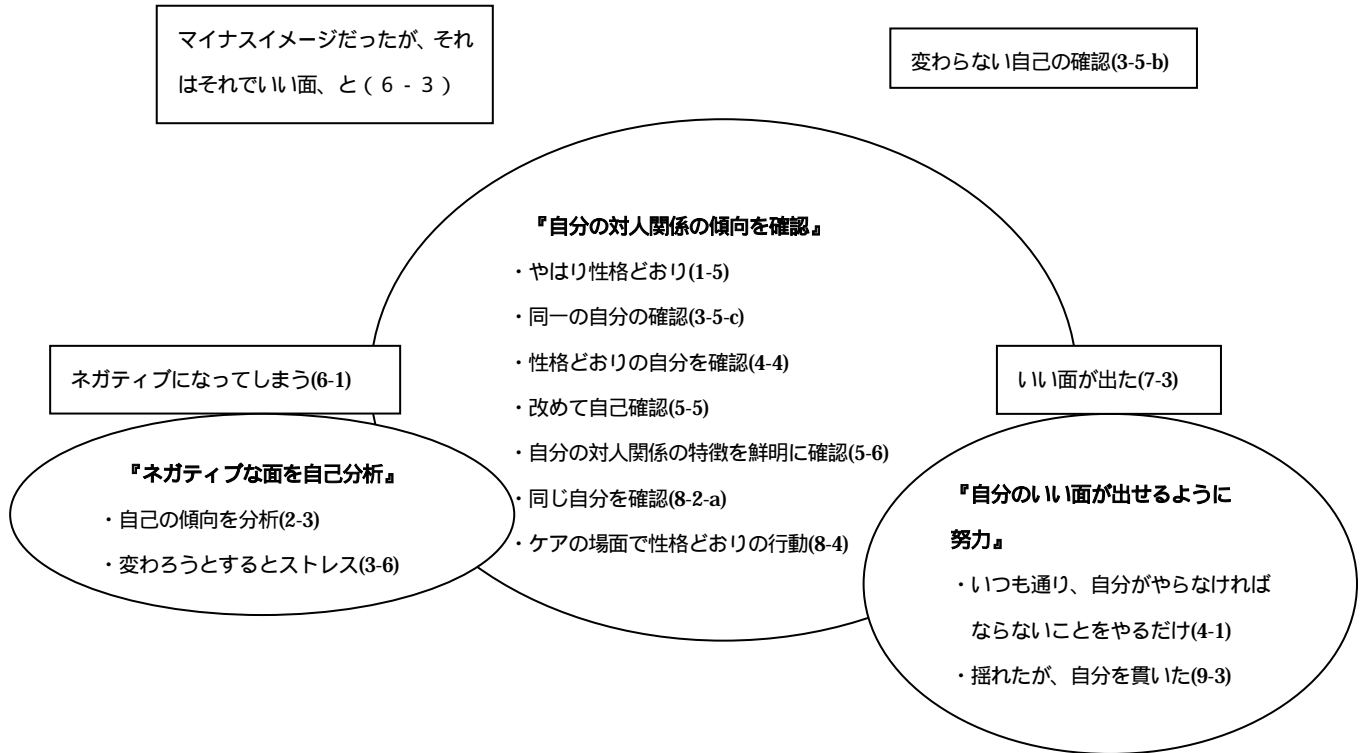


図2：自己意識に変化がなかったとする回答

(2003年3月20日 受理)